

梧園先生日和氣議

都門山廓歲新初瑞氣今朝一樣舒傾盡三杯椒栢酒酖顏先作奉親書

除夕

同 同

又曰奇趣

拂塵聲裡夕陽天喧語猶聞市店邊吾儕無家欲何掃胸襟一洗入新年

瓶中水仙

同 水月仲九

一種芬芳無俗塵冰肌仙骨見天真桃前梅後占春者自是水晶宮裏身

又

同 照板勝美

桃前梅後獨知春楚々寒香自絕塵應是水晶宮裡客仙風道骨見天真

景季簾梅圖

同 隈本繁吉

被髮如雲美少年簾中插得百花仙驛而有角君休咎芳志長傳一谷邊

秋夜書感

川本頁樹

淒涼伴短檠半夜衆虫鳴如訴將如泣聞爲種々聲

寒夜偶成

補充一級 澤村晴夫

燈明四座酒盈缸一片壯心猶未降慷慨悲歌提劍舞朔風吹雪入寒窓

紀元節

硯友會員 吉田 豐

年のはにのどけきものこかし原の御代をし祝ふけふの心が

霞立つ春日のどかにかし原の宮に御代をはしるしめしけむ

同

同

下村

光

万代もうこうぬ國のみはしらを立てまし、日を祝ふりふかな

曉梅

同

同

はるさめのはきてしつげき曉にゆやのひまもるまどの梅か香  
有明の月の光もかすかにてをほろにはふ軒の梅か香

蒙古襲來

同

吉田

豊

いさつしまさふりし仇もないうせむ筑紫の海のもくつとそなる

同

同

下村

光

神風にしつみし仇の澤なまは千ひろのうみもあせやしにむ

雑報

○春色動

年改て煙暗澹雨蒙茸、吾人は寒齋春色の沈々として來る遅きを歎じたりき、然れ

ども大臯已に規を執り歌君連りに律を吹く、北帝如何に貪婪剛愎なると雖是に至てそれ避易の  
情なからんや、東風細かにして流漾々、蘇岳は半之殘雪の冠を脱して、龍山全く陰雲の封を排  
り、梅芳方に薰して淡々たる輕煙に染み、柳眼漸く新にして雍々たる霽色を帯ぶ、綿蠻たる黃鳥  
は彼の丘に啼き、躍如たる胡蝶亦た將さに此野を舞はんとす、春色是に於てか動さぬ、試みに吟  
歩を郊外に轉せんか、熙々たる風光汝が眼を照らさん、欣々たる萬象汝が心に映せん、鬱腦散じ